

資料

ニューヨーク日記(七)

——米国の刑事司法事情管見——

小 早 川 義 則

- はじめに
  - 一 留学に至る経緯
    - 1 留学決意
    - 2 予備調査
      - (1) イギリス
      - (2) フランス
      - (3) ドイツ
  - 二 留学先の決定
    - 1 研究テーマ及び留学目的
    - 2 留学先の選定
- 以上、四二巻一号
- 三 選定の経緯
  - (1) 往復書簡
  - (2) 学内手続き
  - (3) 出発準備
- 3 出発準備
  - (1) 管理組合等
  - (2) ビザ取得
  - (3) ニューヨーク情報
- 以上、四六巻一号
- 1 ニューヨーク到着と生活基盤の確立
  - (1) 住居の確保
  - (1) ホテル住まい



- 3 ロー・クラーク
- 4 具体例
- 九 墮胎とデュー・プロセス
- 1 概要
- 2 ロー対ウェイド判決
- 3 ウェブスター判決
- 4 「保革」の動き
- 5 各州知事、議会への働きかけ
- 6 死ぬ権利とのかかわり
- 一〇 東西ベルリン等訪問
- 1 東欧諸国の大変動
- 2 「ベルリンの壁」崩壊
- 3 東ベルリン
- 4 ブダペスト
- 5 ウィーン
- 一一 帰国
- 1 帰国準備
- 2 西海岸歴訪
- 3 出迎え
- 4 健康診断
- 一二 ニューヨーク再訪

- 1 帰国後の実績
  - 2 英独の刑事司法調査研究
  - 3 ワインシュタイン連邦地裁判事
  - 一三 総括
  - 1 留学時期
  - 2 留学費用
  - 3 外国語
  - 4 今後の課題
- むすびとして

4 米国内外旅行

八八年八月には、夏休みを利用して来訪した妻子（妻のSと子供のT、O）とフロリダのデイズニー・ワールドなどでバカンスを楽しんだが、ウェスト・ポイント等にも出かけたものの、マンハッタンが中心で、米国外に出ることはなかった。もっとも、米加国境上にある橋を越えてカナダ領内に入りナイアガラ瀑布を散策したことがあったが、それはパスポート記載の出国記録カードを書き換えるためであった。全く不注意にも八八年七月一六日のドイツに向けての出国時に必携のIAP 六六を自宅に置いたまま出かけるという大失態を

演じた結果、再入国時に米国での滞在は一九八八年八月二三日までに限定されたため、それまでに一たんカナダ領内に入り再入国時に滞在期間変更の手続をとるのがベストであったからである。従ってカナダ領内での滞在日数も一泊二日にすぎなかったが、ナイアガラ観光はそれで十分で、ホテルレストランの一等場所でナイアガラ瀑布を眼下に見下ろしながらバイキング風の食事を楽しむなどした<sup>（写真a）</sup>後、翌日、アメリカ領に再入国した際、滞在期間の変更手続を無事済ませることができ安堵したのは前述の通りである。

八九年の夏休み時にやって来た妻子と再び七月一九日から八月一三日まで共同生活を始めることになったが、前年の反省もあり、今夏はアメリカ国内だけでなく、ヨーロッパにも出かけることにした。生活者と旅行者との認識の違いで、親子四人の同一家屋での一ヶ月弱の共同生活には耐えきれぬ面があり、むしろこの機会を利用して国外ことにヨーロッパに出向いた方がよいとの判断があったからである。また八八年夏の来訪時には米国ニュージャージー州での運転免許証が未取得であったものの、すでにマンハッタンの地理はほぼ頭に入っており、懸案のビザの書き換えも終了し、精神的にも余裕ができていたという事情もある。



— 写真 a —

以下、大半は純然とした私的な家族旅行にすぎないが、この間の米国内外旅行についてその一部を明らかにしておきたい。なお、ニューヨーク州最高裁判所や合衆国最高裁判所の訪問については章を改めて紹介する。

(1) ポストン ポストンはいわばアメリカ発祥の地でもあり、当然ながら訪問予定地に入っていた。Sが八八年八月、一人でポストンに出かけた際に同行することもできたが、片や美術館、こなたプリマス港では噛み合いに欠けるばかりが、同居生活がはやくも息詰まるような状態で、精神衛生上もしばらく別行動の必要性もあり、後日あらためて訪問したほうがベターと考えて同行せず、子守りに専念したことになる。

ところで、いわゆる巡礼始祖 (the Pilgrim Fathers) と呼ばれる清教徒一〇二名の一行が祖国イギリスでの宗教的迫害を逃れて一六二〇年、メイフラワー号で大西洋を横断し北米の新大陸東海岸のプリマス (Plymouth) に到着し、以降このプリマス植民地 (Plymouth Colony) を中心に徐々に成立したいわゆる東部一三州の植民地が一七七六年七月四日、イギリスからの独立宣言を発し、その後正式に独立が認められた。そして一七八八年に合衆国憲法が成立し、一七九一年に

いわゆる権利章典の一〇ヶ条が憲法修正条項として付加されるに至ったという程度の知識はあった。この程度のかなり曖昧な知識ではあったが、いずれにせよ、とにかくプリマスを一目みたいとの思いは強烈であった。結局、一九八九年二月二日から二四日までの足かけ三日間、ポストン周辺に滞在し、思いを果たしたのである。まさに厳寒の時期であり、寒さと飢えや病気で約半数が死亡したとされる当時の状況をいささかなりとも追体験できたのも有益であった。

以下、フォート・リィに帰宅したその翌日、三日間のポストン小旅行を振り返りつつ、これをとりまとめたやや詳細な日記があるので、これを元に再現しておく。

(a) スシバー「穂高」でアルバイトをしていた田中さんと雑談中、ポストンやプリマスの話をしたところ、「ご案内しましょうか」と言うので、好意に甘えることにした。免許証を取得したのが八八年七月二十九日、中古車を購入し所定の手続を終えたのが九月十九日であり、その後練習を開始したものの、トラブル続きで遠方までドライブできるような状態ではない。ましてや厳寒の二月で積雪の可能性も大いにあり、とうてい一人で遠距離ドライブは不可能である。トラブル続きの中古車がクライスラーのプリマス (Plymouth Turismo)

というのも因縁めくが、ともかく三日間なら休暇が取れるとの田中さんの車でポストンに出かけることにした。ちなみに、田中さんは穂高の経営者樋浦さんの信頼が厚く、何かにつけて、田中、田中と頼りにされていた記憶がある。車の整備会社でも働いていた経験があり、車に詳しい田中さんには、当初の車のトラブル時に、何度もボンネットを開けて見ていただくなど、車関係のことであるお世話になった。車については元来全く興味がない上、渡米寸前の八八年四月に鳥取県の自動車学校で二週間余の合宿で辛うじて運転免許証を取得したにすぎず、車関係の知識が皆無である筆者にとって、まことに有難い存在であった。

二月二日から二四日まで三日間の休暇が取れたとのこと、二月二日午前十一時に出発することにした。筆者は当時、『共犯者の自由』の校正(二校)に没頭していたものの、とくに日本の解釈論としてのアメリカ法との関わり、ないしはアメリカ法をどの程度まで日本法に取り組むことができるかにつき、明確な展望が開かれず、ほぼ一週間ほとんど毎日二階の机に座りぼんやりと外の雪景色を眺めるだけで、校正が全く進まず疲労困憊の状態にあった。とりわけ単身赴任の筆者にとつては、このような閉塞状態を打破し活路を開くに

は何よりも気分転換が必要であり、三日間のポストン訪問はそのための適切な機会であるように思われたのである。



— 写真 b —

(b) 二月二日午前十一時に「穂高」横の駐車場で田中さんと会い、小雨模様の中、一路ボストンへ。さすがペテラン運転手、ニューヨーク、コネティカット両州を経て、ロードアイランド州に入ったところで昼食を兼ねマクドナルドで小休止の後、予定通り四時間余でマサチューセッツ州ボストンに到着した。とりあえず市の駐車場 (municipal parking) に車を預けて市内を散策した。港に接して水族館 (aquarium) があり、その横が地下鉄 (subway) (Tのマークがある、「Transitの略である」) でそれに隣接した小綺麗なホテルのフロントに行くとき空室があり、ツイン (two double beds) で一泊一五〇ドルという。車をホテルの駐車場に入れ直し再び町中を散策した。ニューヨーク (マンハッタン) と異なり違和感がない。ホームレスもほとんど見かけず、町も比較的きれいで、ニューヨークを歩くときのような緊張感はほとんど必要なかった。田中さんによると魚料理 (sea food) は Union Oyster House (since 1826) が最適とのことだ。中に入る。一階は板囲いのある四人用のテーブルのほか七、八人で一杯になりそうなカウンターがあり、その中を覗き込むと oyster が山積みしてあり旨そうだった。二階に上がると四人がけのテーブルが一〇席ほどある。増設したのだろうか、奥の方に

ける。子供連れのアメリカ人の多いのに驚いた。子供は余り見かけないだけに、場所柄にもよるが、これほど大勢の子供 (主に幼児) を見たのは初めてのことだった。

次いで地下鉄に乗りハーヴァード大学を表敬訪問した。ニューヨークの地下鉄とは異なり清潔で、駅の表示方法はロンドンの地下鉄と全く同じで非常に分かりやすい。乗客の感じもニューヨークとは全く異なり違和感がない。一〇分ほどでハーヴァード駅に着いた。地下鉄を外に出たところがハーヴァードの正門らしい。ここに「留学」する可能性のあったことを思いつつ、創始者ジョン・ハーヴァードの銅像の前で写真を撮る<sup>(写真c)</sup>。やはり大学構内は落ち着く。アメリカ最古の大学でかつ最有力校であるだけに、構内も広々としており、その一帯が大学町といってよい。構内及び周辺を歩き回るが、田中さんは余り興味がない感じなので、再来訪の機会もあるうかと思いつ、最後に大学生協 (COOP) を見て帰る。コロンビア大学などはハーレムに隣接していることもあり、周辺に発展する余地がないような感じだったが、ハーヴァードは地の利もあり、全く様相を異にする。さすがアメリカを代表する大学のように思われた。地下鉄の車両は日本のものに比べるとやや旧式 (もっとも、名古屋市内の古い路線とほぼ同じ) だが、乗客は

も他にかなりの席があるようだが正確な数は分からない。Boston beer (黒ビールのような感じでややクセあり) を飲みクラム・チャウダー (clam chowder) ——これは旨い——をスープ代わりに食べた後 steamers と mussels (いずれも貝) のほか sea food parade を注文した。ワインはハウスワインを頼むと、これがフランス製の白ワインでクセがなく旨かった。とくにムール貝 (mussels) は山盛りで parade は食べきれなかった。もっともこのパレードはいわば盛り合わせて大したことはなかったが、まずはボストンの魚料理を経験し、かつ満腹した。ホールに戻り田中さん持参のウォッカ (Vodka-Finlandia) を飲みつつ談笑し、一二時前に寝る。

(c) 翌二月三日は午前八時前に起床、まずはアメリカ最古の公園 (Boston Common) に行く。実はここが観光ルート (Freedom Trail) ——アメリカの独立に至るまでの道筋を辿りたいいわば自由への道程——の起点で、道路上に赤線が引いてある。それを辿っていくとアメリカ軍とイギリス軍との激戦地として有名な Bunker Hill が最終地点で、そこまで往復三、四時間程度だったろうか、歩き続ける。B・Hには記念碑があり、その頂上まで二九四段の階段を上り、ボストン市内を一望した。一たんホテルに戻った後、水族館に出か



—写真c—

きつちりとした服装の人が多く、ニューヨークの地下鉄とは違い抵抗感は全くない。ニューヨーク市内(マンハッタン)はアメリカでも特別で、アメリカの他の地域とは全く異なるというのも頷けた。

少し早かったが、そのまま昨夜と同じ Union Oyster House へ。Lobster の大 (Large) を注文。二五ドル位だったろうか、大きいのがそのまま——ハサミなどは一切入れず——どかっとテーブルに置かれる。大味で味は大したことはないが、身が大きいだけに食べこたえはある。アメリカ人は「ミン」のころを食べず、味のついた足と尾の部分だけを食べると聞いていたが、やはりその通りだった。こちらは真中の「ミン」のころを食い散らしたわけだが、まずは満腹して帰る。二人で合計七〇ドル程度だったはずで、日本に比べるとやはり安い。

ホテルに戻ったものの、話も余りないしどのようにして時間を潰そうかと考えていると、丁度テレビでヒロヒト崩御 (Hirohito Funeral) の放映中だった。ニュース専門局 (NBC) が七時半から一時半まで四時間ぶっ続けて放映していたのである。フシユ大統領は葬儀参列をボイコットすべきとあるところ American League of Historical Accuracy と

擁護派の日系米人連盟の各代表者のやりとりがあった。前者は全く感情的でパール・ハーバー攻撃時の日本語の新聞を見せつつ、外国元首の葬儀に参列した大統領はニクソンが初めてであり、ましてや第二次大戦の「戦犯」の葬儀に大統領は絶対参列すべきでない」と主張する。これに対し、後者は、大戦後四四年経過し、現在の日米関係を考慮に入れると云々の論旨で、実に落ち着いて明確に話していた。まさかボストンでこんな番組を見るとは思ってもいなかったが、いろいろ勉強にはなったし、田中さんとの会話の代用にもなったわけ、有益かつ有用であった。

(d) 二月二四日は午前七時半に起床した。昨日と同じく新聞が届けられていたが、その中に Express Check Out と書いた封書の中に請求書が入っていた。初めての経験だった。それを讀むと、「本日ご出発の予定と伺っておりましたので、チェック・アウト時の便宜のため、本日午前四時現在のご利用代金の請求書を同封しておきます。右時間以降のご利用代金については、フロントにお立ち寄り時にお支払いいただくか、あるいは二時間以内に郵便でのご請求致します。このシステム (Express Check Out) をご利用いただく場合には、正午までにフロントにその旨お知らせ下さるだけで結構です。キーは

部屋の中に置くか、またはフロントのキー箱にお入れ下さい。マリオット・ホテルをご利用いただき、有難うございました。又のお越しをお待ちしています」と旨記載されている。そこでフロントに電話するようになった。「Can I help you, sir?」「Yes, Thank you for your Express Check Out, I'll use it.」「Your room number, sir?」「Well, 531」「Thank you very much, sir.」乗に簡単明瞭であった。急ぎのときは本当に助かる。

ホテル内で朝食の後、キーを部屋に置いたまま駐車場へ。車を出すときに係員にチップとして二ドル渡すと「Thank you very much, sir.」ちなみに二日間の宿泊代金は、部屋代一五〇ドル、税金八・五五ドル、市税六ドル(各一日分)の二倍で、それに駐車場代金一七ドルが加算されて総額三四六・一〇ドルで、日本円にして五万円程度だからそれほど高くない。偶然であったが、マリオット・ホテルのチェーン・ホテル (the Boston Long Wharf Marriott Hotel) で、従業員の教育も行き届いており快適だった。なお、チェック・イン時にカード(アメリカン・エクスプレス)を提示してあるので、先の電話連絡だけで迅速に支払いができたことになり、非常に便利であった。

(e) まずはボストン茶会事件 (Boston Tea Party) 発生之地へ向かう。愛国派の急進分子が一七七三年、ボストン港で東インド会社所有の多数の茶箱を海中に投棄し、これが発端となりイギリスからのアメリカの独立運動が加速されたというその現場である。当時の船(再現)がそのままボストン港内にあり内部も見ることができるようになっている。中国製の茶箱を見たり、狭い船室を何度も出入りした<sup>(再現)</sup>。高校時代の世界史の時間などで何度も茶会事件のことは見聞きしたが、まさに一見は百聞にしかずである。今日では大学を含めた教育の現場でウイジュアル教材が多用されており、このことは教育的効果の上からも望ましいことであるが、さらに教える側が現地に一度でも足を運んだ経験があれば、説明にも迫真力があり、学生、生徒の理解力増進に格段の相違があることは間違いない。現地に身を置くことの大切さを改めて痛感した次第である。もっとも、この茶会事件の現場は閑散としており、われわれ二人以外に誰もいなかったが、これは日本でも同様で異とすることではない。

次に車を駆って約三〇分(?)で到着したのがプリマス (Plymouth) である。ここはぜひ一度は見えておきたかったところだけに、いささか感慨に耽ることができた。撰氏マイナ

のレストランも一軒を除きほとんど閉店で、やはり寒いので冬の一時期はすべて閉店のようにだった。途中、ロード・アイランドのHoward Johnsonの店で軽く昼食したほか一路ニューヨークへ。このH・JはフロリダのDisney Worldで泊って初めて知ったのだが、全米有数のホテル、レストラン等の経営会社で、「不可避的発見」の判例の中にこのH・Jモーターを取引場所にした麻薬事件があったので興味深く、そのような話をしながらドライブを続けた。雪は全くなく予定よりかなり早く着きそうなので、田中さんがかねてから言っていたホワイト・プレーン(White plain)にある日本人経営のレストランに立ち寄ることにした。

(f) ホワイト・プレーンはニューヨークまで電車ではほぼ一時間、当初はこちらで住居を確保しようかとも考えていたこと、そして新しい客を連れてくることは田中さんのプラスになるのだと思うつつ、「店」に着くとまだ四時半で従業員は仮眠中であつた。オーナーは丁度起きたところらしく、中に入ったものの、やはり五時開店であり迷惑だろうと考え、一たん外に出て周辺を散策し五時に戻る。隣が日本の食料品店「大道」で、中を覗き込むと二歳位の男児を連れられた日本人女性が買物に来ていた。まだ開店して間がないとのことだった



—写真d—

ス六度で頬が切れるような寒風の中を車から外に出て Plymouth Rock—Pilgrim Fathersが第一歩を印したといつところ、一六二〇と刻み込んだ大きな岩が一つ置いてあり、その周辺を簡単に囲ってある——を見た後、停泊中の復元されたthe Mayflower号内に入らうとしたが閉っている。周辺



—写真e—

だが、オーナーはややヤクザっぽい感じの好男子だった。六時半頃になると満席(二五名位か)になり、待っている人も増えてきたので辞去した。雰囲気は「穂高」のほうがベターだが、随分苦勞して初めて自分の店を持ったようで、夫人(やはりやや水商売の雰囲気)とその弟ら合計五人の人数をかかえて何とかやりくりしているとのことだった。

ニューヨークまで車で四〇分。途中からよく知っている道とかでずいぶん飛ばしたため無事帰宅するとまだ八時だった。そこで中で休憩してもらってしばらく雑談した。ガイド兼運転手であり、また効率よくボストン周辺を案内してもらったこともあり、宿泊費等の支払いは当然だが、別に少ないが気持だけといって一〇〇ドル渡す。田中さんの渡米の理由は知らないが、車の修理工として七、八年、「穂高」で一年、現在の「写真店」で数年間、その間時々、穂高でアルバイトをしているとのこと、一〇年前後の在米期間らしい。ともあれ、平日の三日間休暇を取り寄内してくれたわけで、一〇〇ドルは安い、いろいろな事情を考慮するとあるいはreasonableかも知れない。

(2) フィラデルフィア フィラデルフィアには二度出か

けた。二回目は八九年七月末、ワシントンD.C.からの帰途、妻子とともに立ち寄ったが、最初は六月一九日、「穂高」の超常連の某氏の車で出かけた。

(a) この某氏、写真関係の技術屋さんで数年前に全く思いがけず急に米国の関連会社への出張を命ぜられ、それ以降、単身赴任中の身で、一刻も早く日本に帰りたいが、会社は帰してくれない。丁度、パブル全盛期のころで某氏のようなケースを多く見聞きしたが、米国籍在員の資格、条件も様変わりしたことは間違いない。一九八〇年夏、本学の短期在外研究制度を利用して夏休み中におよそ二ヶ月にわたり、スペインを皮切りにヨーロッパやカナダなどを旅行したが(本稿(四)本誌四六巻四号一五八頁注(9)参照)、確かスペインのセビリヤで妻子同伴で長期休暇旅行中の日本人男性と一、二言葉を交わしたことがある。その男性は日本の石油会社派遣のアラブ首長国連邦駐在員とのことだったが、同じ暑中休暇といっても、片や帰国予定は立たず、こちらは一ヶ月後には帰国する気ままな一人旅であり、雲泥の差がある。バスに乗り込み次の休暇予定地に向かうのを見送りながら、「羨ましいですね」と言われた言葉の意味を噛みしめた思い出がある。大阪外大の同期生の大半が駐在員等として世界各地に散らばっている

完全な酩酊状態で車に乗り込んだのは驚いた。ままよと同乗したものの、道路が広いとはいえず、文字通りの酔払い運転であるため、車が大きく右に左に動き、冷汗をかきつつ無事帰宅してほっとした思い出がある。この某氏、飲酒運転の常習犯とのことで、幸い人身事故はなかったが、何度も物損事故を起しており、破損した車を見かけたことがある。筆者も危機一髪で助かったといえるのかもしれない。

(b) 約束の六月一九日午前九時半に「穂高」横の駐車場から出発。丁度二時間でフィラデルフィアに着いた。中心街の地下駐車場に車を止め、市内を散策した。B・フランクリン(Benjamin Franklin)やT・ジェフマンソン(Thomas Jefferson)など周知の人物が集まり、一七七六年七月四日、アメリカ独立宣言はここで発せられた、いわばアメリカ合衆国誕生の地であるだけに興味は尽きない。なお、七月四日(Fourth of July, July Fourth)は独立記念日でもあり全米各地で祝賀会が催されている。例えば、ニューヨークのハドソン川流域ではこの日に盛大な花火が打ち上げられ、筆者も対岸からではあるが、観覧したことがあり、七月四日は忘れ難い日となった。

まずは独立宣言読み上げ時に鳴らされたという有名な自由

であることをつつ、日本の生命線でもある石油確保のために第一線で働いておられる様子を垣間見た思いがしたのである。とりわけ、優雅で品のよい典型的な日本女性ともいえる物腰の夫人が、その全身で羨ましさを示していた——かに思われた——姿はまだまだ脳裏に焼き付いている。むろん、比較の対照にはならないが、某氏に接して、このようなことも想起されてきた。

某氏と会えば、努めてこちらから話しかけるようにした。年に数回は帰国するという某印刷会社の現地社長であるTさん等とは異なり、一時帰国はもちろん、妻子訪問も一度もない文字通りの長期にわたる単身生活であり、失礼ながら、愚痴を聞く必要性を痛感したことによる。そのためでもあるうか、筆者の帰国直前に送別会をしていただいた。突然、「一人で送別パーティをしたい」と言うので、好意を受けることとし、日時を決めて案内されたのが韓国系のバーで、深夜まで痛飲した。正直なところ、筆者の送別会というより、ご自分のストレスの発散会という感があり、カラオケを歌いまくる姿に圧倒された。それが実に上手で、自慢のノドを披露するのが某氏にとってのストレス解消法であるように思われた。帰りの車のことを心配しつつ専ら聞き役に徹したが、帰りは

の鐘(Liberty Bell)を見学(見学)した後、修復保存されている当時の議会などを見て回った。昼食を兼ねた休憩時に地図を見ていると、T・ジェフマンソンが閉じこもって独立宣言の草案を書き上げた家が補修され保存されているとの一文が目にとまり、早速出かけることにした。受付でどこから来たのかときかれて、Japanと答えると、日本語のパンフレットがあ



— 写真 f —

ると言って、ドイツ語、フランス語、スペイン語と日本語の四ヶ国語で説明のあるパンフレットをくれた。中に入ると、ベッドのほか、足洗い桶などもあり、興味深かった。建物の出入り口のところは、「この敷地上にトーマス・ジェファソン



— 写真 g —

ンが独立宣言を書いた家が立っていた」との掲示があった。その他、一七七四年九月五日から一〇月二六日まで第一回大陸会議 (the first Continental Congress) がここで開催された旨その二〇〇年を記念して一九七四年に建立された碑文な



— 写真 h —

どに接し、まことに興味は尽きなかった。お世話になったので夕食を御馳走したと言ったところ、やはり「穂高」が落ち着くとのことだ。一路フォート・リイに帰ることにした。やや早すぎて時間があったので、途中ハドソン河沿いの Scenic View に案内してもらった。対岸のマンハッタンを一望できるところだ。しばし思いに耽った後、穂高で閉店時まで雑談に興じた。

(c) 第二回目はおよそ一ヶ月後の七月二十日、夏休み時にやって来た妻子とともにフィラデルフィアを訪れた。もっとも、このときはワシントンD.C.からの帰途(後述)、列車 (Amtrak) で余り気が進まない妻子を引き連れてきた感もあり楽しくなかったが、それなりの収穫はあった。

ワシントンD.C.で一泊後、タクシーで Amtrak Station に向かった。このワシントンD.C.駅はさすがに立派で駅というより官庁といった感じで、チケットも航空券と全く同じだし、駅内部も立派だった。ただ、Amtrak の列車自体は大したことはなく、ヨーロッパの Intercity と比べると格段に見劣りする。定刻の三〇分遅れの九時半に出発した。フィラデルフィアの information の City Hall まびたの位かかると聞く。一五ブロックだから歩いて行けるといふ。そこで歩き

出したが、目的の Liberty Bell はそれからさらに一五ブロック先にあり、何とか到着したもの三人が疲れた、疲れたの連続で、結局、ここは素通りに近い状態で、車で Philadelphia Museum of Art に行くことになった。ここで軽く昼食をとり絵画等を観覧した。なお、この正面玄関はボクサーの「ロッキー」が練習中に階段をかけたところとして有名である。疲労気味でタクシーを探したが、なかなか見つからず、やっと来たタクシーを停め、駅に戻ることにした。この運転手さん(はじめての白人)、実に愛想のよい人で「どちらから?」「Japan?」「What part of Japan?」「Osaka」といつたいきなり密置シズ子の歌を歌い出したのには驚いた。定刻発の Amtrak の New Ark に直行し、ここからタクシーで帰宅した。「Where?」「Fort Lee」「Let's go.」「道順は分かるか」「分からないが George Washington Bridge まで行けば分かる」。スペイン系の人で、メーターを倒さず走ったが、フロントガラス横に大きな文字で 9119 と車番号その他が書いてあり、いかなる苦情も陸運局までお申し出下さいの表示がある。やや大回りして到着し料金は三〇ドルだったが、別にチップとして六ドル(一五、二〇%が相場)渡すにシッカリした。「帰れますか」「もちろんだ」「Take care」で別れる。なお、大

きな空港のタクシー乗り場には必ず駐車係 (dispatcher) がいて、行き先を告げると料金を紙に書いてそれをくれる。また駐車係の有無に関わらず、一定地域までの料金は定額であるため、メーターを倒す必要がないことが多い。

このように二回目のフィラデルフィアは妻子にとつては疲れに行つたようなものであったが、成果がなかったわけではない。散策の合間に入った店で合衆国憲法関係の書物に接したのは有益であった。その大半は小中学生向きの解説書であったが、憲法の国民生活への浸透ぶりが窺われて興味深かった。もっとも、合衆国憲法は、イギリス領北米東部二三植民地の代表が一七八七年フィラデルフィアに集まり合衆国憲法制定会議を開催して作成し、後に九邦の批准を経て発効したもので、その意味でフィラデルフィアは合衆国憲法と密接不可分の関係にある。したがって、アメリカ建国の歴史や憲法に関する書物が多いのも当然といえば当然であるが、二〇〇年余を経てなお小中学生向きの概説書が山積みされていることに羨望ともいえる気持ちを抱いたのは事実である。確か合衆国最高裁判事のブラック裁判官 (Hugo Black) が合衆国憲法を納棺時に入れて欲しいと遺言していた旨の記事に接したことがあり、あらためて彼我の違いに思いを至したことなども想

起された。ただ、Sらのようにほとんど関心のない人間にとつては、憲法の氾濫ぶりにやや食傷を覚えるであろうことも同時に実感したことであった。

(d) とくろで、七月一九日の妻子来訪時にハブニングがあった。全くの余談だが、稀とはいえず、ニューヨークに限らず外国の大きな国際空港では時に生じうることもあり、簡単に記しておく。

野中保博さんの好意で八九年七月一九日、午後五時半にやつて来た野中さんの車でラ・ガーディア (La Guardia) 空港まで妻子を迎えに出かけた。さすがベテランで三〇分ほどで空港に到着した。Delta-Northwest の建物に入ると、すぐそこが手荷物の受け取り場所、もう着いているはずで掲示板を見ながら探し始めると、右の方から学生風の日本人がこちらを見ておそるおそる「Are you from Japan?」「ええ、そうです」「すみません、あれは何でしようか?」と Ground Transportation Center を指し示しつつ「JJ」はどのようにして行けばよいのでしょうか」といふ。手に取って見ると New Ark International Air Port Hotel の予約券である。これはニュージャージー州の空港だから、早くても車で一時間余かかる。「どうしてこんな所にホテルをとつたの。一寸ここに待つ

ていて下さい、子供が来ているので探してきます」「はい」間もなく手荷物を受け取り、待つていた三人と再会した後、先程の岡本君の話の話を聞く。関東の某国立大学の三年生で大阪の進学校として著名な甲高校出身、夏季講習会(?)でコロ

ンビア大学で一ヶ月間 dormitory に入つて勉強するのだという。New Ark への途中だから、まずは Fort Lee の拙宅で休憩した方がベターである。そこで車の上で手を振って待つていた野中さんの諒解をとり一緒に帰宅した。「外国へ来たのは全く初めてです。今日九時までにコロンビア大学に行つて手続をしなければなりません。しかし、夜の九時まで事務職員がいるのか不明で、結局、今夜は野中さんの所で一泊し、明日コロンビア大学まで野中さんが連れて行くことに決つた。ホテル代は九九ドルで支払済みというが、車で往復するとほぼ同じ料金だし、時間のロス等を考えるとその方がはるかにベターである。「どうする?」「そうしていただけるなら有難いのですが」。随分まじめそうな学生だし、「野中さん、悪いけど」「いや、いいですよ」「まさに地獄に仏だね」。実際、全く初めての外国でのこと、振り返ってみても、一寸したことが嬉しく、又美に助かることは間違いない。Sらによると、飛行機もデトロイトから同じで、何かソワソワ不安げだったという

がその通りだろう。やはり日頃学生に接触していることもあって気楽に誘つたのだが、ともあれ、「まるで夢みたいですが、有難うございます」といふ彼を野中さんに任せろ。

この岡本君には後日譚がある。翌七月二〇日、夕食後にテレビでアイオワ州の飛行機事故——緊急着陸に失敗し、三〇〇人ほどの乗客の中で半数位は生存の可能性あり、生死を分けたのは座席場所という——を見てみると、突然ブザーの音がして鳴りやまない。O が電気のもりで押したところ、これが medical emergency button で、止め方が分からない。中国人オナーに電話しても不在 (留守電)、木下さんも留守で夫人では分からない。止むなく野中さんに電話すると「すぐ行きます」。間もなく来てくれたが、ケンジのほか岡本君も同道していたのには驚いた。dormitory の手続を済ませるため、ケンジが岡本君をコロンビア大学に連れていったが、「野中邸」に下宿することになるかもしれないと野中さんから連絡があったとあり、結局そのように決つたのだという。ベルは鳴り止んでいたが、再度 medical button を押して「対策」を会得した。暫く雑談後、これから「Tミに行く」というので同道することにした。ホモ——というよりいわゆる両刀使いというがその真偽は定かでない——のオトミさんの経営す

るバーで、前後に何度か同道したことがある。野中さんのカラオケの独壇場で、結局閉店の午前二時までいた。この間に岡本君に、やはり職業柄か、やや教訓めいたこと——昨日会ったのも「出会い」、野中さん宅にいと勉強はできないかもしれないが広い意味での勉強はできる。あとは君次第云に——を繰り返したが、野中さんの真情の一端に触れた感じで嬉しかった。岡本君、「甲高校に入ったけれど、すごいのが一杯いて、ついていけませんでした、妹もやはり同じです」にむしろ好感を抱いた。二、三の実例を示しつつ、人間万事塞翁が馬「出会いを利用できるかどうかが君の試金石」と言っただものの、反省させられることも多かった。

翌七月二二日午後一時から野中邸でバーベキューをするようになった。出かけると、下宿することに決定した岡本君は野中さんの指示に従って下準備に大奮だった。これも勉強だろうと思いつつ、コロンビア大学には月から金まで、各五分のレックスが毎日四回というので、この機会を利用して一ヶ月間ニューヨークを見て歩くよう勧める。やはり初めての地下鉄はハーレムで降りたこともありショックを受けたとのことだが、当然のことではある。その後も岡本君は下宿人を兼ねて全く未経験の皿洗いをしていたが、勉強になったはず

で、上手に「出会い」を利用するようにとの忠告を繰り返した。野中さんの話では、岡本君、一ヶ月間、予定通り月曜日から金曜日まで朝八時に出かけ夕方六時に帰宅する真面目振りだったという。帰国後、確か挨拶状をもらったが、卒業後のことについては知らない。なお、ニューヨークには、「F K' La Guardia, New Ark」の三空港があると紹介されることが多いが、New Arkはニュージャージー州にある。ただ、どの空港も日本からの直行便があり、空港からマンハッタンまでの距離はLa Guardiaが最も近いが大差はない。

(3) ワシントンDC 七月二四日から二七日までの四日間、妻子とともに小旅行をした。主目的はワシントンDCであったが、その前後にWilliamsburgとフィラデルフィアを組み入れることにした。ワシントンDCからAmtrakに乗り一たんフィラデルフィアで途中下車し帰宅したが、フィラデルフィア訪問は不評であったものの、筆者にとっては、得難い経験であったことは前述した。

(a) 七月二四日朝、正確に予約時間にやってきたタクシーBabe'sに乗り、New Ark空港に向かった。早朝でもあり、正味二五分で到着した。午前七時一〇分発のUS Airlinesの

子会社(っ) Piedmont Airlinesで、午前八時すぎにBaltimoreに到着。九時一〇分発のHenson Airlinesの双発機(っ)に乗り換えNew Port Newsに到着した。ちなみに航空運賃は一人一三九ドルで合計五五六ドル、Amtrakの運賃を入れると四人で総計九〇六ドルであった。

到着したものの、西も東も分からず、タクシー乗り場もない。Taxi Limousineの表示のあるところを聞くと、一人八ドルの切符を買って二〇分後に迎えに来るとのこと。三二ドルを支払い待っているが、かなり年輩のdriverがやってきた。それに乗り宿舎のWilliamsburg Lodgeへ。感じのいいところだが、当然とは見えDisney Worldとは規模が違い、内容的にも格段の差。まずは付近の略図をもらって検討しても自分からず、「地球の歩き方」を参考に目ぼいてところをチェックした。明日のGreyhoundの予約が気になるのでタクシーを呼んでもらってbus stopへ出かけたが予約不可とのこと。止むなくinformationへ。driverにinformationと言いたはずがvisitors centerへ連れていかれてチケット(Williamsburg内の主な名所及びバスが無料となる)を買ったところまではよかったが、Governor's PalaceのしおしがCapitalに到着するまでのミスが重なり、結局Williamsburg内を三、四

回無料バスを乗り回すことになった。もっとも、その頃にはほぼ全域の地理を把握できた。食事はすべてLodge内にとりたがまずまずであった。

翌七月二五日、地理はほぼ頭に入ったので、主なところをバスと徒歩で駆け巡った。Williamsburgはヴァージニア植民地の首都であった(現在の首都はRichmond)とJONP、ロックフェラーが一八世紀植民地時代の建物や議事堂などを再現し、現在はいわば歴史村として多くの観光客を集めているという。確かに敷地は広大で、愛知県犬山市にある「明治村」とは比較にならぬものの、京都や奈良などの古都とは歴史の重みが違う。その意味では全く興味が湧かず、ほとんどアメリカ建国のお話ばかりで「ややOが退屈しきったのも当然で、二度と来ることはあるまいと思った。ただ、最後に訪れた広大な敷地に囲まれた「ロックフェラー記念館」はさすがに立派で、人影もまばらな敷地内で小一時間休憩し、アメリカ建国の歴史に思いを馳せたのはそれなりの意義があった。

(b) 早めにタクシーで近距離のGreyhoundのバス停へ行き、小休止し、午後三時三五分に出発した。Non-stopと思っていたところ、これは金曜日のみで、よく見るとの番号を打っており、これが金曜日の意味で確かドイツでもそうだった

たことを思い出した。Richmondで乗換えのため一時間半待ちで、結局、予定通り午後八時半にワシントンDCに到着した。大人は一人二〇ドル、合計七〇ドルはやはり安い。Customers Serviceで情報を得た後、半分壊れかかったような流しのタクシーに乗りHoward Johnsonへ。乗る前に値段を聞いたがとつさに分からず聞き返すと、紙片に一〇・六〇と書いてくれた。OKで乗るとすぐそばに国会議事堂(Capitol)などの見覚えのある建物があった。疲れているし、先に夕食を済ませた。これはH. J. Motor's Lodgeで、一晩四人で八九ドルと格安だが、設備は先日のLodgeとは比較にならない。夕食は併設のFamily Restaurantで、お肉を食得なかつた。まずはビールを頼む。No alcoholic beverages. くれには参つたが止むなし。水をがぶ飲みする。All you can eatで一人九ドルほどで食べ放題。二人分を頼み、ほかにスパゲティ二人前、いずれもまずくてムリに押し込んでの夕食だった。アルコールを一滴も飲まずに寝たのは二〇歳のときに流感にかかり四、五日身体が全く受け付けなかつたとき以来ではないが、一、二時間眠れなかつたが「休肝」の意味はあると思ひ諦めるほかなかつた。

(c) 翌二六日は、おちおち近く(two blocks)のMetrorail

standmanのものだがGrand Canyonを舞台にしたものでその迫力はすごい。Grand Canyonをも満喫した感あり。外に出ると夕立で、止みそうにないのでタクシーに乗りLincoln Memorialへ。有名なリンカーンの巨大な座像があり、大きさは台湾で見た蒋介石の像の方がはるかに大きい。その影響力は比較にならない。夕立は止まず、このリンカーン記念堂に一時間以上閉じ込められたが、その間リンカーンを繰り返し仰ぎ見るなど興味深い体験をした。

小降りになつたので外に出て、運よく通りかかつたタクシー(とじつはLimo)に乗り、桜で有名なPotomac Parkを経てリンカーン暗殺の場であるFord Theaterへ。ここまでは一人八ドル、実に感じのいいdriverなので合計三二ドルに八ドルチップを加えて渡すとThank you very much, sirで握手を求めてきたばかりか、右側の窓を開けてO.D.もThank youを連発。近くのFBI本部の建物を見た後しばらく散策。Metroに乗りホテル近くの駅まで、三〇分ほど歩き回ってChinese Restaurantで夕食を済ませ八時半頃に帰り始めるが途中で有名なTowers Recordがあり、中に入る。出るのもう一〇時前だった。方向はほぼ分かり、徒歩一〇分のはずがやはり夜道。Virginia Ave.を覚えていたから誤りはなかつた。

の駅へ。チケットの買い方が、テレホンカードと似ていて一定の(好みの)金額を入れるとその金額を表示したカードが出てくる。乗車時にこのカードをinsertして抜き取るとドア(日本のものと同く似ているが左右に開く)が開く。降車時に同じ動作を繰り返すと残額を明示したカードが戻ってくる。足りない時は構内の機械でこのカードとお金を入れるとOKで、残額表示のカードが戻ってくる仕組み。現在の日本と同じ仕組だが、金額が固定していない点異なる。内部は暗いがBabe'sの運転手が言っていたとおり、"Not like NY"で清潔で安全、しかも快適である。乗客もニューヨークとは全く異なり若い女性も多く、背広姿のビジネスマンが圧倒的だった。さすが世界の政治の中心地の感あり。ただ、南部地区の黒人居住地では薬物取引をめくり殺人事件が続発しているのは周知だし、Greyhoundのバス停周辺もニューヨークほどではないが黒人がたむろしていた。

一駅先で降りてホワイトハウスへ。一〇時から一二時まで内部見学ができるが、すでに整理券を持った長蛇の列で、内部見学を諦めた。その後スミソニアン博物館(Smithsonian Institution)で月の石を見たが、無造作に置いてあるだけ。日本ではじつはごくまれ。館内で映画「Flyer」を観る。

たが、やや横道に逸れてしまい、二人の人に尋ねた後やっとホテルへ帰ることができた。夜間しかも外国の道で迷うことは厳禁で、徒歩一〇分のところとはいえ、車道が交差していてややこしいところ、叱りつけつつ帰ってきた。この点筆者はかなり慎重で、まずこんなことはしない。ともあれ一〇時半頃に帰れてやれやれだった。

(4) ロンドン 当初はOの希望で「Anneの日記」の現場を見るためオランダで二泊し、アムステルダムに行く予定だったが、K旅行代理店のミスが重なり、オランダは中止、当初二泊予定のロンドンで三泊、残りを現地で予約することにし、結局、七月二九日から八月八日までのほぼ一〇日間、いずれも駆け足だったが、ロンドン、ブルージュ、パリとヨーロッパ小旅行をすることになった。これは妻子の長期滞在で息詰まりを経験した昨八八年夏の反省の賜ものでもあった。

(a) いつものようにBabe'sに電話し、七月二九日午後五時のタクシーで出発。ケネディ空港からTrans World Airlinesに乗りロンドンのヒースロー空港の三番ゲートに定刻の八時前に到着した。

入国手続はほぼ三〇分で終了した。一人ずつ係官の前に立つ

て簡単な質問の後スタンプを押してもらい、luggageを受け取り customs へ行く。数名の係官がいて「不審者」のみ呼びとめて荷物を確認する。後方にいた一人の東洋人が呼びとめられていたが、「お前は一度質問を受けたがそのまま通過して、まずはお金の exchange。三年前は新装の四番ゲートだったが、これに比べて三番ゲートは古くてやや雑然としていた。地下道を通り抜けて少し歩くと Metro に出る。information でホテル名を示して最寄りの Metro を尋ねると Paddington という。さらに一日中バス、地下鉄乗り放題のチケットをなぜ買わないのかというので早速購入した。Paddington 駅から徒歩一〇分ほどで Victoria Garden Hotel に到着した。小さいホテルでまずまずだが、reception 横の部屋でややうるさい。四日目はキャンセル待ちでとりあえず三日間連泊することにした。部屋は掃除中のためロビーで休憩。その間筆者のみ一人で周辺を歩く。Hyde Park が近くにあり、まずは便利などころ。その後ホテルに戻り少し寝た後ロンドン市内を散策した。三年前にはほぼ踏破したつもりが、やはり最初はカンが戻らず、中心地の Piccadilly Circus を出ず、Soho があるという Chinatown を探したが見当たらない。正確な地図がないので当然ではあるが、三人とも「疲れた」「疲れた」で止

むなくビザの専門店に入り夕食をかねて小休止し、九時すぎに Metro に乗りホテルに戻る。Family room を頼んだはずがなかったのだらう。Two Twins でやや高いのはバス付きのためである。

(b) 翌七月三十一日は、まずは National Gallery を皮切りに Tower of London, Big Ben, Westminster Abbey を見学した後 Soho の中華街で夕食をとった。昨夜は目と鼻の先まで来ていたのだが結局分らず帰ったことになる。ロンドンの街全体が記憶に戻ってきたようだ。一〇時頃の地下鉄でホテルに戻る。今日も Traveler's card を利用したがまことに便利である。昨夜 Victoria Station が closed のため買えなかった Oxford 行きと Belgium 行きの切符を Paddington で購入できたので「安心した。また中華街から Piccadilly Circus まで歩いたが、駅の横に S が以前泊ったというホテル (Regent Hotel?) を見かけ、reception でキャンセル待ちの二日の宿泊を booking できたことも有難かった。

八月一日は、まずマダム・タッソー 蝋人形館 (Madame Tussaud's) に出かけたところ、これが長蛇の列でチケットを買わずに「二時間かかりそう」ところが「地球の歩き方」によると隣のプラネタリウムとの combine ticket を買

うことが可能で、こちらは即購入可能のようだった。そこでこのチケットを買って長蛇の列を尻目に（やはり愉快）マダム・タッソーに入場、人形とはいえさすがによくできている。等身大のナポレオンと並んで写真を撮るなどした後、飽きず

にしばらく館内を歩きまわった。職業柄さすがというべきか、処刑場面を再現した「恐怖の部屋」で銃殺刑やギロチン刑の「実物」のほか、リンドバーグの子供の誘拐殺人で電気刑に処せられた B・ハウプトマンそのままの蝋人形とその横の説明書に釘付けになった。

昼食を簡単に駅の立食いで済ませてオックスフォードへ。列車は汚いが閑散としている。およそ一時間で到着。駅構内改修工事のため以前の面影は全くなく、しばしば戸惑ったが、



— 写真 i —



— 写真 j —



—写真 k—

駅前方の広場を見て思い出す。歩いてもしまっているが、一日乗り放題のバスがあるというのでそれに乗り中心街へ。下車し地図を見てみると、三年前にこのあたりを一人で歩いた記憶が甦ってきた。時間がないので一部見学の後、記憶にあった教会の頂上に登りオックスフォードの街を一望する。乗り放題のバスは五時頃で運転中止のため駅まで歩く。当初予定していた次の列車は急にキャンセルで、日本ではまずないことだが、ヨーロッパでは必ずしも珍しくはない。ホテル近くのイタリアン・レストランで夕食をとった。年輩のボーイさん、まことに賑やかで、うるさすぎると丁は怒っていたが、イタリア人にしてもやや陽気すぎるし演技の感あり。隣に三人連れの日本人女性の相客がいたが話すこともなく、一〇時すぎにホテルまで歩いて帰った。

(c) 八月二日は、大英博物館 (British Museum) に行く。地下鉄が終日ストでタクシーも空がなく、バスに乗り記憶のある Tottenham で下車した。丁の指示したヤングに人気のあるという店を探し回ったが見つからず、住所は分かっていたのでタクシーに乗って出かけた。Museum に近いところだったので、間もなく歩いて大英博物館を訪れた。このあたりも記憶にある。その後二手に分かれ、筆者のみ一人で裁判所を

見学した。まず三年前と同じ高裁へ。入口でカメラ持込不可といわれ「絶対に撮影しません」と言ったものの、すで見学済みだし、時間の関係もあり Old Bailey へ。これは第一審刑事中央裁判所として著名で、三年前に見過していたところ。徒歩三〇分余で到着したものの夏休みのためだろう閉まっている。やむなく建物のみ写していると白人女性がやって来てカメラをさし出したので、彼女を撮影した後、Old Bailey を背景に写真を撮ってもいい。歩き疲れたのでバスに乗り、ふと気がつく Oxford Street と Reagent Street の交差点、あわてて下車し、二、三の店を覗きつつ Piccadilly Circus 角のホテルへ。Y はお目あての店でジャンパーを買ったらしい。Liberty (百貨店) にも寄って「ウサギ」の世話を頼んでいる知人に一寸したおみやげを買ったという。丁持参のロンドン案内にある「推せん」の中華料理店へ。Soho の中にあるのだが味はもう一つ。「昨日の方が洗練されていていい」「推せん」の店というのは所詮「」の程度だろう。ともあれ Soho 界隈の地理が頭に入ったことは収穫ではある。このホテル、部屋にトイレのないのは不便だが、まことに至便なところに位置している。

Method は終日ストで、ロンドン四日目の夜を中心街のこ

のホテルにしたのは正解だった。ストのため予定が狂いパツキング宮殿の内部は見学できなかったが、裏門あたりで衛兵は見る事ができたし、主なところは回ったわけで十分といえるだろう。アメリカで一年余暮し、またあの汚いニューヨークの subway を見慣れたせいも、三年前とは大いに異なり、ロンドンでは全く緊張感はなかった。これも留学の成果といえるのだろう。旅行代理店のミスでロンドン二泊が四泊となりオランダ行きは中止となったが、結果的にはこの方がベターといえるのかもしれない。ロンドンにはいずれまた来ることもあるが、地理がほぼ頭に入ったこと、そして違和感がなくなったことは有難い。今回は田舎の Inn に宿泊したと思った。

(5) ブルージュ (ベルギー) ベルギーには一九八〇年夏同僚の野上博義さんとローマで合流し、オランダのハーグにある国際司法裁判所やアムステルダム「アンネの日記」の家などを歴訪した後、首都ブリュッセルを訪れ、駅前の formation で紹介してもらった小さな個人ホテルで一泊した後、パリで別れた経験がある。オランダ語とフランス語が公用語であるが、フランス語を母語とするの方が圧倒的に(?)

多いためもあるが、ややパリに似ており、ホテルのレストランでの夕食が廉価で実に旨く、東洋系のシェフと楽しく語り合った思い出がある。ブルージュ (Bruges) については不案内であったが、中世の景観をそのまま残す「水の都」の観光都市であり、sらの希望で当初から今回の小旅行の日程に組み込まれていた。

(a) 幸い地下鉄のストが解消したので、ホテルから地下鉄に乗り Victoria Station に向かい、駅構内でチケットインを済ませた。三年前は Victoria 駅でのチケットインはなく大行列であったはず、合理的で有難い。パリ行きとベルギー行きは同じ列車に乗り Dover で分れる。定刻の八月三日正午発一時間ほどで Dover に着いた。パリ組とベルギー組とに別れてチケットを示してそのまま船内へ。前回は途中から一たんバスに乗り換えて Dover に行き、ここで行列に加わりチケットを購入したため、野上さんへのみやげを買う余裕はなく大急ぎで空中翼船に乗ったことなどを思い出した。

二時間余でベルギーに着き、immigration を出るとすぐ先に列車がきており発車間際、三〇分程でブルージュに到着した。明日のパリ行きのチケットを購入して時間を確認した後、information のある center まで歩く。三〇分程で到着したが、

僧院に立ち寄り庭を散策したが、〇は近寄ってきた小鳥を相手に立ち止まったままで動かない。〇は小動物には目がなくとくにウサギや小鳥を見つけるとまことに無邪気になって戯れる。二、三の旅行者がそれを写真に撮っていたが、やはり絵になるのだ。(写真1)

川に沿ってしばらく散策した後 Groeninge Museum へ。ブルージュには至るところにこのような美術館があり、広い街ではないにしても主なところを見学するには二泊程度は必要だろう。男性用セーターなどを売っているよさそうな店があり、セーター一着を買う。七、八千円程度だったろうか、日本と比べるとやはりずいぶん安い。船でブルージュ内を一周するなどの後、(写真2) 残金でチヨコレートを買って駅まで歩き、列車でパリ北駅に向かった。

(6) パリ パリにはいずれも短期間だが、二度出かけたことがある。一度目は、八八年夏のヨーロッパ一周旅行の際、西洋 (フランス) 法制史を専攻する同僚の野上博義さんと場末(?) のホテルで一泊した後、野上さんに見送られてド・ゴール空港からトロントに向かった。二度目は八八年八月、留学中の野上さん宅に宿泊させてもらい、単独で又は野上さ

初めての町でもありそれらが全く分からない。観光の中心部であることは間違いないが、information を見つけるのに一苦労し、やっと地図を入手したもののホテルの場所を聞くところ out of town という。止むなくタクシーに乗ると、駅を通り越してかなりの距離のところにあるホテルだった。あの旅行代理店はブルージュのことは何も知らず、適当に大きな chain hotel の一つを選んだらしい。ブルージュは中世の面影を残す古い街であるから市街地を散策するところに値打ちがある。さんさんsらに悪口を言われながらチケットインの後、またタクシーで町の中心部に戻る。みやげ物店に入った三人と別れてしばらく一人で歩く。ほぼ輪郭の分りかけてきたところで合流し八時頃まで周辺を散策した後、あらかじめ見つけていたイタリアン・レストランへ。

帰りのタクシーを呼ぶと、これが先程と同じ driver で英語を話す感じのいい人だった。ホテルは庭も広々としており、野兎もよく見うける閑静なところだが、結局、タクシー代だけでホテル代の六割ほどかかり、金銭的にも愚の骨頂といえる。

(b) 翌八月四日は、早めにチェックアウトを済ましタクシーで駅に行き荷物を預け中心街まで歩く。途中で実に関静な尼



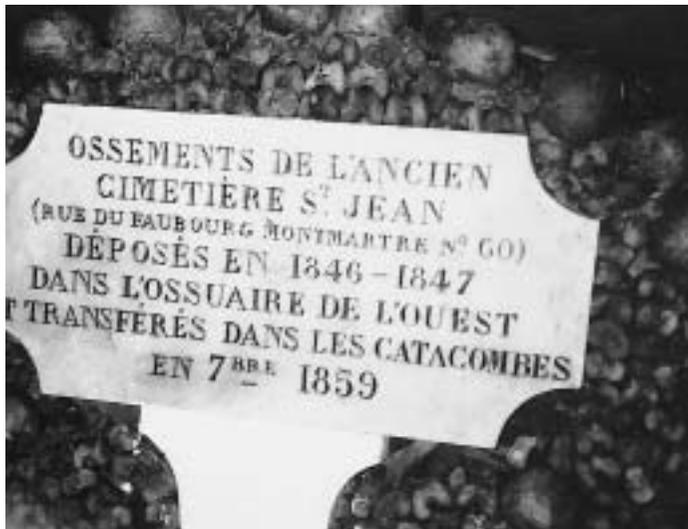
— 写真1 —



— 写真 n —



— 写真 m —



— 写真 o —

んの案内でパリを歩き回った。一度目はパリに宿泊したにすぎなかったが、二度目は前後一週間ほど滞在し、ことにパリ北端の繁華街の下方にあるカタコンベ（地下埋葬地）で百万体もの死体の骨が薪を並べるように積み重ねられているのを見て一驚したことがある（本稿〔本誌四二巻一七二頁参照〕。またSもすでに何度かのパリ来訪の経験があったが、T、Oにロンドンのほかパリを見せておくのもいいだろうと考え、当初から最後の宿泊地としてパリ四泊を予定していた。

(a) ブルージェ観光を終えて八月四日、列車でパリ北駅 (Paris Nord) に向かった。車内で入国手続があり、Sがフランス語で答えると係官が「あなたはフランスに住んでいるのですか」、Sが気をよくしていたが、それはともかく、さてどうするか。ホテルは地名と電話番号のみ、最寄りの地下鉄の駅名が書いてあれば至便なのにそれがない。この点もまことに不十分かつ不親切である。この北駅はややニューヨークに似ており雰囲気は余りよくない。Sが information へ行き、パリの地図をもらってくる。ホテルは Champs Elysees 近くにあるとのことだが、タクシーは行列のため地下鉄で行くことにする。Franklyn Roosevelt 駅で降りて外に出るとシャンゼリゼ通りで、すぐ上方に凱旋門が見える。さてと道路標

識を見ると丁度目指す道路の表示があり、約一〇〇メートル先に当のホテルがあった。中に入ると階下と階上に分かれており、上は寢室とバス、トイレ、下はソファに机、それにワープロが備えてありビジネスマン向き、これで一泊一万五千元ほど。昨夜の不評を取り戻した感じで、〇とTは大喜び。もう九時頃だが外はまだやや明るく、しばらく散策の後、Sが日本料理を食べたいというので近くにあった「ヤキトリ」に入る。スシバーとは別室になってるのだが、店員は慣れすぎていようで余り感じはよくないし、スシも旨くなかった。一〇時すぎにホテルに帰り寝る。ちなみに、この小綺麗なホテル (CIDOTEL, Les hotels an coeur de paris) 部屋の利用は一二時から、チエックアウトは一二時で、Marianne通りにある。八八年夏、ドイツ留学中の同僚の上野泰男さんとダツハウ強制収容所を訪れた際に宿泊したミュンヘン中央駅に近いホテル (本誌四六巻四号一四七頁参照) もそうだが、気に入ったホテル名は地名とともに正確に書き留めておく役に立つ。

(b) まずシャンゼリゼ通りを歩き凱旋門に昇る。三年前も昇ったが今日は好天で放射線上のパリの町が一望で実によく見える。このあと一たんホテルに戻り半パンに着替え地下鉄

てほほえましく思ったのだらう。<sup>(写真d)</sup> St. Michael からソルボンヌ、パリ大学のある Quartie Latin を散策、ややコミコミしたレストラン街に入り、街路に出っ張った店で通行人を見ながら食事を済ませ、八時半頃に地下鉄で Monparnas へ。頂上に昇りパリの夜景を楽しむ。ここは三年前に野上夫妻と一緒に来た所で記憶にある。なお、途中、ミッテラン大統領の私邸前を通ったが、ここも記憶にあり、以前と同じく警官が警備していた。Sがお巡りさんにミッテランの家があり警備しているのすかと聞いていたが、ニコニコ顔で答えるのは日本ではおそらく見られない光景だらう。地下鉄に乗り一時間ホテルに帰る。

(c) 翌八月六日は、まずルーブル美術館へ行く。ところが日曜日で入場無料のこともあるのだらう、これまた長蛇の列で Versailles に変更した。Sは一人で歩きたいというので、T、〇とともに Versailles 行きの観光バスに乗る。バスは宮殿の構内付近で全員を降ろした後チケットを配り、四時に又ここで pick up するという。これも野上夫妻と来たことがある。すごい混雑ぶりだ、ざっと一巡する。王や女王の寢室を見てもどうってこともないが、ルイ一四世のフランス絶対王政時代の建築物であるだけに一見の価値はある。ホテルでS

で Eiffel Tower へ。長蛇の列のため外から見るとどめだがエッフェル塔が実にきれいに見えた。<sup>(写真e)</sup>

続いてシテ島へ。途中で毎食のあと Notre-Dame へ。Sは当初しぶっていたが、結局全員で上まで昇ると今日は最上層のボールのところまで昇ることができ、ここで写真を撮った。〇は「ノートルダムめむし男」の感想文を書く予定もあり、彼女なりの感慨があるのだらう。頂上でわれわれの後にいた一人の日本女性(教員風)が「写真撮りましょっか」「お願いします」。あと一歩のところまでボールを捕まえないTを見



— 写真 p —



— 写真 q —

と合流し、小休止の後シャンゼリゼの裏通りを散策する。シャンネル等の有名店が目白押しだが、日曜日なのでほとんど閉店だった。やっと開店中の Chinese Restaurant を見つけて食事したが、店内は豪華だが味はそれほどでもない。

(d) 八月七日は、別行動の S と別れて T、O を連れてあらためて Louvre へ。チケット購入までに三〇分かかった。中庭に新しくできたピラミッドに入り、下に降りるとチケット売場のほかレストランなどがあり、三年前とは様変わり。以前はそのまま中に入れたわけだが、最近は Louvre プームとかで、これがないととても捌ききれまい。一六歳以下は無料なので大人一枚のみ購入するが、入口で T、O のパスポートの提示（年令確認のため）を求められて困った。結局、入場を許可されたが一つの教訓ではある。唯一ガラスのボックスでおおわれたモナリザの前は相変わらずの人ばかりで、T が正面に行き写真を撮ったところこれがフラッシュ。写真撮影は原則として可だがフラッシュ撮影は禁止、もっともフラッシュは規則違反だがほとんど黙認されている。ただ T はモナリザの正面で撮ったため、係員が T を追いかけてきて厳重に注意。筆者も「フラッシュ禁止」の表示を指さしながら T を叱りつけたためもあり、係員は立ち去ったが、「知らなかった」



— 写真 r —

T に再度厳しく注意した。もっとも、筆者も自動フラッシュを ON にするのを失念したためフラッシュで撮り注意された経験がある。故意ではないものの心すべきことである。

なお、やはり三年前に一人で Louvre に出かけた折のことか思い出されてきた。数時間かけて歩き回ったため、美術館内部の輪郭が分かりかけてきた折のことだが、一人の日本人女性から声をかけられた。「日本の方ですか」「はい」「団体で来たのであと一五分(?)程しか時間がありません。三口のヴィーナスを是非見たいのですが、どこにあるかご存知です

か」。不確かながらヴィーナス像の位置——館内の通りの真中に置かれているため遠くからもよく見える——はほぼ頭に入っていたが、たまたま案内嬢がいたので、ままよと「Excusez moi, Où est Venus de Milo?」、よく「Où et Milo のところを強調し尋ねたところ、La とその方向を示してくれたので、その日本女性に「あの方向です」と教えたことがあった。思い返すと冷汗ものだが、この種のことは貴重な経験で忘れ難い思い出の一つではある。

ホテルで S と合流、周辺を散策の後、「Alsace でカキ、貝(すべて生)などの大盛りを食べる。シャンゼリゼ通りに面した店で大繁盛しており、五〇分ほど待った後やっとテーブルに案内された。その間、ピエロのような芸人が通路上で「芸」を披露していたが、余りにもしつこすぎる感じだった。大阪のミニミあたりでやると間違はなくケンカになるほどきわどく通行人に接近し、肩に触ったり、ヒモをつけて落ちないようにしたカップとスプーンを目の前に突き付けたりしていた。途中で二人組の芸人が道具を地面においてやあら「芸」を始めようとすると、この男その二人組のそばに行つて何か一言、二人組はすぐ道具をしまつて別のところに移動した。彼らのしきたりなのだろう。ところで料理は高知の皿

鉢料理のようなもの。S はおいしそうなので前から一度食べてみたいと思っていたが、食べてみると大したことはないと言っていた。その通りで、専門店でカキなどの一品料理を注文する方が賢明のように思われた。——一時すぎになり、さすが店内の人もやや少なくなったが、依然として客足は絶えない。

(e) 八月八日は、午前八時半に頼んでいたタクシーで De Gaulle 空港へ直行した。この運転手さん、さすがパリっ子というべきか、下はジーンズで上は長袖だが、横に置いてある背広はまことに粋で対応もさわやかだった。TWA 航空の入口に着くと、すぐそこで security の検閲があった。前の米国人(?)夫妻も時間がかかったが、われわれもかなりの時間検閲を受けた。英語も仏語も全くできなかつたらどうなるのだろう。三年前の爆弾騒ぎでやや騒然としていたパリとは異なり、治安は随分よくなった感じだが、底流にはやはりとくに政治犯との関係で難しい問題があるのだろう。それにしてもこの security の担当者、しつこすぎる感じだった。あと二ヶ所の関門があり、やっと TWA 機のそばへ。出発が一時間遅れたが、当初の予定通り二時〇五分 JFK 着、七時間ほどかかったことになる。往路は確か六時間のはず。Immi-

gration では全員係官の前に立つ。I A P 六六に Approved の印があるので、「じつは何をしていますか」「I'm doing research」といって research と記入しただけで、改めて一九九〇年五月一〇日まで滞在を許可してくれた。二、三の客拾いがやってきたが無視して「Taxi stand」で driver に値段を聞いたところ、その運転手が dispatcher (担当官) に聞き返し、六五ドルの返事を得て OK した。Babe's のタクシーでチップ込みで六〇ドルなので、altogether (すべて込み) で六五ドルを再確認後、これは good deal だと人のよさそうな黒人の driver に繰り返しこつこつ乗る。喜んでた運転手に「George Washington Bridge までの道順を教えて帰宅」「take care」で別れる。時差六時間でさすがに疲れていたが、まずは「Express」の郵便を post office に行き受け取る。予想通り成文堂からの三校の残りが来ていた。必要な買物等を済ませると午後七時半。お腹をこわして何も食べないという O (オカユを食べる) を残して「穂高」へ行く。田中さんが来ていたが会うのはポストン以来で半年ぶりだった。ほかにも常連客がいたが、彼らは早いときは六時頃から閉店時まで座っている。この点八時半に出かける筆者とは全く違うが、日本のサラリーマンでも同じだろう。一時間余で早々と切りあげて帰宅した。

などの具を詰め込み、全員で食べたが、実に楽しかった。野中さんは早めに帰宅したが、やや早すぎる感はあるものの、こつこつした点でも十分な気配りをする方で、勉強になった。

(b) 午前七時半に野中さんから電話があり、予定通り八時に出発することになった。車で Amish に三時間余で到着した。全世界で数万人、このフィラデルフィア近郊の町に一万一千人の Amish が居住している。彼らは「聖書」に忠実に生きることを信条とし、電気類は一切使用せず、交通輸送機関は馬車に限られる。幼児洗礼を否定し、一〇代になって初めて自分の意思で Amish の一員となるかどうかを決定するのだという。チケットを買い三〇分ほど説明をきき Model House 内を歩いたあと farm を見学した。その後 Amish が多く住む地域の靴屋さんを訪れ、野中さんが何足かの靴を、筆者は靴ペラ (〇・ハドル) を買った。丁度 Amish の女性が四、五歳の男児を連れて馬車に乗ってきていたが、われわれを見て微笑んだのは実に感じがよかった。途中面白そうな店で小休止するなどしてフォート・リィに戻るにはや八時で East Restaurant に行きまじゅうこの野中さんの誘いで Teanack にあるイーストでこつこつ馳走になった。筆者はそれほどでもなかったが、車中六時間余の日帰りの強行軍であり、他

(7) アーミッシュ等 予定どおりのヨーロッパ小旅行を終えて帰宅した翌日の八月九日朝、待ちかねたように野中さんから電話があり、アーミッシュ (Amish) に行きませんかという。初めて聞いた地名だが面白いということで、翌八月一〇日、日帰りでもらつこつにした。

(a) 今日一人だということで折り返し電話で昼食を誘ったところ、買物の話になり「行きまじゅう」という。百貨店 (Glooming Dale) まで野中さんの車で出かけることになった。平日のごとく閑散していたが、sはここが随分気に入ったようだった。筆者は使い古したスニーカーを捨てて新しい Reebok を買うことにした。大安売りの四〇ドル余だったが、あとで気付くと made in China で、今まではほとんど Korea 製であっただけに驚いた。T、O がポシエットなどを買うのにつきあったものの、時間がかかりすぎるのでいらした。野中さんは泰然と「こんなものですよ」と言ってくれたが、反って恐縮した。買物を済ませて野中さん宅で休憩中、岡本君から今夜は外食する旨の電話があり、では夕食も一緒に誘ったところ、餃子が食べたいというのでステーキの予定を変更して、筆者の自宅で冷凍の餃子の皮を戻し、ニラ、白菜



— 写真 s —



—写真t—

の三人は文字通りぐったり。懐の深いアメリカ社会の一端を見た思いで勉強になった。

(c) 妻子の帰国が後三日に迫ってきたため、マンハッタン周辺の目ぼしいところに出かけることにした。Tはどつして「The Museum of Modern Art」や「Tiffany」に行きたいという。Sは「Metropolitan Museum」に行くという。そこでSを「Metropolitan Museum」前で降ろした後、T、Oを連れて近代美術館へ行くこととし、四時半頃「Tiffany」で待ち合せることにする。Babe'sを呼び、予定通りのコースで出発。近代美術館は初めてだが、ピカソ、マチスなどの作品が多く、ここも「Museum」として著名である。中庭はニューヨークのオアシスの感ありだが、今日は雨で閉まっている。時間と場所を決めてO、Tを自由にさせる。「Tiffany」は相変わらずで団体の日本人客が多く、しかも一階——小中学校の体育館位の広さ——の正面右にある比較的安い品物のところに群がっており、数えてみるとそこだけできつと六〇名いた。二階にも上がってみたが、これも一階ほどではないものの日本人が目立つ。余り行きたくない場所の一つである。五月に来た日弁連の一行も最後はここで買物をしたはずで、ブランド志向日本人を端的に示しているのだろう。SとTも何か買ったようだが、O

は全く知らん顔だった。一時間ほど忍耐を重ねて付き合ひ、バスで帰宅した。夕食は近くの「Shoptite」で買ったステーキ（三人で二ドル）で済ませた。

(d) 八月二二日、今日も雨である。Oが自然史博物館（American Museum of Natural History）の再訪を強く希望するので、その後やはりOが見たいというオノ・ヨウコさんの家（その前でジョン・レノンが殺害された）に出かけることにして、帰国準備の終了後、早々と昼食を済ませてBabe'sを呼び、雨のせいでGWBを越えるまでに四〇分余かから博物館に到着するまでにおよそ一時間かかった。チケット（金額自由）を求めたところ五時から無料になるというので、一五分待つことにして五時に入場した。六時から「To the Limit」&「Fly」を観る。前者は文字通り人間の限界への挑戦（登山、スキー、パレー等）で、その間に体内（肺、心臓、血管）の動きを見せる仕組で見事というに尽きる。一年前に見た鳥の巣を見たいというOの希望をかなえるため、あちこちを迷い歩いた後、ふたたび出出て「The Biology of Birds」の部屋へ。Oは小鳥などを見ていると無心そのもの。七九丁目から七十二目まで歩き、カニ専門店「Sidewalker」の正面にあるというオノ・ヨウコさんの「マンション」へ。「見たら分かる」と

いつただけに、やや黒ずんだビルを見てTがこれに間違いないという。八番街に面しているのだが「Sidewalker」の右前に位置しており、間違いない。数枚の写真を撮った後、通りがかったタクシーを停めて交渉する。帰りが難しいと渋っていたがGWB近くだし、三ドルで行かないかというところKで、結局一五分で帰宅した。道路通行料（toll）がかかるからBabe'sでも二ドル位だからまずまず。久しぶりに白人の運転手さんで、知人の女性が日本人の子供に英語を教えているとかで気持ちのいい人だった。昼に買っておいいた「Chang's」の焼肉等で夕食を済ます。Oが完全に回復してモリモリ食べたのが何よりだった。

(e) 帰国予定の八月二三日、約束通りきたBabe'sの車で八時半に出発した。日曜日のため道路はがらがらで、一七分で「La Guardia」に着いた。三七ドルに七を加えて四二ドル支払う。丁度出発二時間前で乗客はほとんどいない。手続をすませて「Babe's」に妻子を見送った後の一〇時に迎えにくるよう要請する。JFKと間違えて「La Guardia」に来てしまったという日本人男性に尋ねられて二〇ドル位だからタクシーに乗ることを勧める。この人、筆者を迎えにきたBabe'sに交渉していたが当然断られていた。二〇分余で帰宅、さすが早い。

日曜日だし、バスだと二時間はかかる。車で空港までの送迎ができればよいが、運転については格別、あの複雑な道ではとても無理。帰宅後、シーツの残りを洗濯、階上、階下を掃除すると気持がよくなった。同僚の山田豊さんから九月四日帰国予定との電話があった。明日から帰国時点まで筆者宅の居候となるわけで、五時半に Lincoln Center の Opera 前に迎えに行くことを約束する。彼の場合、一人で放っておいても問題ないが、九月一日にやって来る柔道の師匠、大橋恵講道館七段の場合には終日エスコートが必要で、六日間は完全につぶれる。もっとも随分お世話になった方だし、予定通りのことでは no problem。

七月一九日以来、正味二六日間、大バカンスを楽しんだことになるが、あの「圧迫感」が完全に除去されたことが何よりも有難い。今夏はいよいよヘソクリを降さなければならぬが、これも予定のコース。T は一年前と比べて随分落着きが出てきたし、自信もついたのでろう。O はいよいよ反抗期、さてどうなるかだが、こちらはわが道を行くのみ、階下の勉強机兼用のデスクなどを整理する。

(8) カンクーン(メキシコ) 八九年秋から九〇年度春ま

でが正念場であったが、その間に東欧諸国の激変が相次いだため、ロー・スクールよりも東西問題に心が奪われ、テレビの関連報道の視聴にあわせて、ニューヨークタイムズの関連記事の精読に精力を傾倒することになった。そして遂には東西両ベルリンにかけ、崩壊した「ベルリンの壁」を現認するなど貴重な経験をするが、それは現地で社会主義の壊滅という二〇世紀後半最大の歴史的事件に遭遇した結果に外ならない。そして後述のように九〇年三月から五月の帰国時まで内外の旅行に明け暮れることになった。

メキシコのカンクーン(Cancun) 訪問はその間の息抜きであったが、カリブ海に面した世界最大級の観光地であることもさることながら、スペイン語圏である中南米諸国の一国に足を踏み入れたのは、少なくとも筆者にとってはまことに意義深いことであった。九〇年三月の段階で、帰国時までの旅行計画を立て、「穂高」などで知識を得たカンクーンには三泊四日(三月二三日から二六日まで)の予定で出かけることにした。気は進まなかったが前に利用したこともありK代理店を介して、行きはJFKからMexicana航空、帰りはNew ArkまでのContinental航空で、計五四九ドル、ホテルはJ-T近くの便利なところを希望したため、一泊一五〇ドルで三



— 写真 u —

泊すると四五〇ドルとなり、総計一〇〇〇ドルとなった。しかし、八九年夏のブルージェエでの失敗を繰り返したくないし——K代理店にはその旨強調——場所柄を考えると、また東京などと比較しても決して高くはないし、トラの子の目減りは覚悟の上だし、片言のスペイン語を使うのも楽しかろうと考えた結果である。

(a) 九時に迎えにきたBabe'sにJFK空港のMexicana航空と指定し、四〇分で到着したがどうもおかしい。ここはMexicanaかと聞くとそうだといい。アフリカ方面へ行く飛行機があるだけで、今度はチケットを見せて聞くと、この黒人の係員がYou are wrong. といって受付の人に見せると二ブロック向こう側とのこと。on this sideの二ブロック向こう側にあるというので「安心。この係員が何度も指を差して教えてくれた。はや一〇時二〇分、荷物を引きずり何とか到着すると、Aero Mexicoでこれはかなり大きい。紛らわしい名前が多いので十二分に確認の要ありと反省した。ここでTourist cardをもどす。Jのcard(二重)に必要な事項を記載すると九〇日(三〇日)程度の滞在ビザが入国時に交付されるとのこと。「地球の歩き方」を持参していたので大いに役立つ。ビジネスクラスだったのでsilverとしてvipの部屋で

休憩。大したことはないが、グリーン車と同じくこうしてのんびりと旅行するのも年輩になると必要と思いつつ、TCCに必要事項を記入した。boardingの時間になりましたと女性の先導でゲートへ。ビジネスクラスは半分ほど空いており、キャブテン席が見える一等席だった。定期の二時発で少し早く三時四〇分に着いた。降りたところがimmigrationで、雰囲気は全く一変。一〇数年前にスペインに行ったときのことを思い出す。よく似ているがはるかに悪い。tourist cardとパスポートを見せると一言もいわずTCCに許可日数を書き、スタンプを押し「写し」を返してくれるだけ。この写しは出国時に絶対必要ということで大事にパスポートに挟み込み、一〇ドルをペソに換える。一ドルはおよそ二七〇〇ペソのため、にわかに大金持になった。外に出るとまさに発展途上国 (underdeveloped country) の風景が眼前に展開、オンボロバスと八人乗り程度の「自動車」が一〇台ほど待機し、客が順次乗りこむ。全く分らないので掲示をみて zone 2 のところに Fiesta Inn Golf とあるので、その前に停まっていたバスに乗る。しばらくすると運転手が何かを集めている、ふと見るとチケット。immigrationを出たところで予め買うことが必要らしい。慌てて下車して六五〇〇ペソでチケット

を買い求める。先ほどのバスに大急ぎで駆け込むと満員で、横の小さな「自動車」に乗れというが、これも満員。すると運転手が adelante (前へ) と一言、結局助手席に乗って出発した。

あるホテルで全員を降ろした後 Fiesta Inn へ。K 代理店の話では車で五分だったが、予想通り、不動産屋の宣伝文句と同じで、二〇分ほど走ったのではなかったか。これが行き止まりのゴルフ場横のホテルでまさに Inn だった。reception に行き名前を告げると、どうしたわけか、同系列の Fiesta Americana Cancun にチケットを依頼した連絡が入っている。そこに行けという。代理店の話ではとにかく一泊して、後の二泊は変更可とのことだったが、ともあれ有難い。ところがタクシーはない。聞くとバスに乗れという。このバスはホテルの宿泊客に限り Hotel zone を周航しているようで、規模は全く違つが Disney World などでも同じやり方で、納得して乗り込み、Fiesta Americana で下車した。このホテルは高だけあって(支払い時の請求はすべて込みで一〇〇万ペソ)立地条件は抜群、ホテルの窓から眺めるカリブ海は美事だった。チェック・インするとボーイが荷物を持って部屋まで、一〇〇〇ペソを渡す。ダブルベッドが二つでかなり広い。

眺望もよい。下において海岸を少し歩いた後、ホテル内を散策。ここなら少々高くてもよいと思いつつ外に出ると、これが道路を隔てて Shopping Mall があり実に便利である。もっとも、アメリカ人のヤングがやけに多く、この点はがっかりしたが止むを得ない。このモール街を歩いていると information があつた。マヤ文化遺跡の代表格と思われる Chichen-itza へのバス旅行が八時出発で九〇〇〇ペソ(三六ドルほど)。これはひく考えた末、これなら間違いなかつと判断して申し込む。食事は近くのメキシコ風料理で簡単に済ませた後、さらにしばらく散策して周辺の地理をほぼ頭に入れ、Fiesta に戻り一一時頃寝る。

(b) 翌三月二十四日は、七時に起床した。朝食は Fiesta 内のカリブ海に面したところで実に気持ちよいところ。ロビー入口まで迎えにきたバスに乗る。日本人を含む一団のグループがいた。ホテルを順次まわって客を拾い、最後は満席になった。ドイツ人やフランス人もいるが、ほとんどアメリカ人だった。そのまま一路マヤ遺跡 Chichen-itza を目指す。途中でカヤぶきの実に粗末な「家」が点在、時々見かける人はほとんど裸足で modern house というのはコンクリートで固めただけのもので、その中につるした「ハンモック」が見える。体

格は日本人より一まわり小さく、写真でみるエスキモーのような感じだった。

ある大きな「町」を通過し、「家」らしきものが散見されたが、人々の服装は基本的に変わらず、屋台などはいつか見た台湾のそれよりもお粗末、子供のままと遊び以下で、何をすることもなく佇んでいるような人が多い。休憩所ではしばらく停車したところ、各出入口のところ数人の子供たちがしきりに money! money! と呼ぶ。母親らしき女性二人はこちらを眺めるだけ、休憩所内には絶対に入ってはならない様子だった。アメリカ人(男性)の一人が出入口のところまで行き外の写真を撮っていた。子供たちが群がり money! money! と呼ぶ。いくらかの小銭を与えていた。今度はその同伴者の女性が少し離れた所からコインを投げ捨てると、子供たちがわれ先に走りよる。見るに絶えない風景である。戦後の日本での「Hello, give me candy」の風景と重なり、しばらく見つめる。先ほどの掘立小屋「ニューヨークの Hispanic Harlem」メキシコからアメリカへの大量の不法入国、麻薬密輸入、中南米の左翼ゲリラの勃興などと重なり、連想は尽きない。

まもなく Chichen-itza に着いた。バスを降りてガイドの案内に従ってジャンゲル(というほどでもないが)内に点在す

る寺院の一部を見る。中央にある「神殿」の階段に登りかけたが、かなり急なため、途中で中止し、別の少し低めの「神殿」に上まで登る。ほとんどの建物は蛇を模しているようで、蛇が神の使いとして崇められたのかどうか不明だが、一三世紀頃の原因不明の理由で急に崩壊してしまっただけというこのマヤ遺跡の広大なこと。まだまだ未発掘の部分が多いはずで、全貌が明らかにされるのはいつの日か。三時間余り歩き回った後バスに乗り昼食場所へ。従業員は本当に小柄な人たちばかりで、マヤ先住民の末裔なのだろうか。並んでいると先ほどのグループの一人の女性が、椅子を空けて「よろしければここにお座わりになりませんか」。最もハキハキした感じのいい人で、もう一人の男性と夫婦かなとも思っていたが、どうもそうではない。座って少し雑談した。会社の視察をかねた慰安旅行で「日本旅行」のキャリアフォーニア支社に勤務とのこと。たまたま筆者がK代理店の悪口(もつ)「縁」を切る(を言う)「[トウゴ]利用下さい」と会社名の入ったMisako Tochikuboとある名刺をくれたので、西海岸旅行時には「あるいは」と言っただけ告げる。他の女性軍もしゃべりはじめたが美に明瞭。新しいタイプの外国在住の日本人といえるのだろうか。とくにこの女性を利用して見るのもいいのでは



—写真v—



—写真w—

ないかと思いつつバスで一路帰途へ。途中の最後の休憩所でグループの男児と少し遊ぶ。かまって欲しくてたまらない様子で、完全に bilingual。このグループは先に降りたので挨拶を交わすことはできなかったが、ミサコさんがしきりに手を振っていたのが印象的だった。「商人」としてもこうあるべきだろう。客のほとんどがドル又は二〇〇ペソをチップとしてガイドに渡している。筆者もドル渡し、有難う、では又(Gracias Amigo. Hasta la vista)でホテルに着いたのが丁度午後八時半だった。

ホテルでシャワーの後、外に出る。見かけたイタリアン・レストランに入りビール二本、ワイン一本、スープ、それに海の「果物」の入ったスバゲティを食べ、チップ込みで一〇万ペソ(四〇ドルほど)でやはり安い。途中でハッと気がつくとき常時肌身をはなさないカバンがない！一二時間半のバス旅行で少し疲れているし、ワインで少し酔っ払っているが、じっくりと振り返るとシャワーのあと手ぶらで出たことはほぼ確実だが、こうなると落ち着かない。そそくさとワインを一気に飲みほしてホテルへ直行。ドアを開けるとカバンがあり、嬉しかったこと。とくに疲労時には注意確認を怠らないことの必要性を痛感した。昨夜は三ドル余で買ったテキーラ

を飲んだが、その気にはなれず、そのままいろいろと思いに耽りつつ寝る。

(c) 翌朝は八時頃起床。朝食後 Fiesta 内を歩く。Information があり、中に入ると Cancun Cruises のパンフレットが目についた。天気はよいし、これにしようかと思いつつ所要時間を見ると午前一〇時から午後四時まで。一たん部屋に戻り再考後、申し込む。九万ペソだが、今日、明日利用のタクシーの支払い——ドルの方を好む——を考慮してドルで支払う。昨夜のバスではほ場所は見定めていたが、繰り返し確認した後、歩き始める。波止場到着が丁度九時三〇分で気分よし。服装は昨日買ったカンクーンの半パンと半袖シャツに麦わら(？) 帽子。一〇時前から船上で生演奏があり賑かだった。一〇時すぎに出発、やはり海は美しい。いろんな所を旅行したが、美しさの種類が違うような感じで、やや沖繩の海に似ている。日本人グループ(男性ガイドに女性四人、後に老婦人Aとその娘B、Cと孫娘Dと判明) がいたが、お互いにチラッと見たままで言葉を交わさず。そのうちに一たん休止の生演奏再開でタンゴ等のダンスが始まると、このグループ中のB、Dが中に入り踊り出した。はじめは偏見——ダンスのできないわれわれと同世代の日本人男性の共有するもの?——があ



— 写真 x —

り、軽薄な連中と思っていたが、見てみると実に上手で堂々としている。男性ガイドと目が合ったのでその横に座り少し話す。このKさん、JTBに所属して中南米のガイドをしているが、カンクーンに居住しているため、主にカンクーンが中心とのこと。「商社の方ですか」「いいえ、疲れたし五月に帰国しますので遊びに来ています」「いいですね、失礼ですが何をなさっているのですか」「NYLSで二年間の客員研究員。日本では法律——刑事訴訟法——を教えています。下船時にこのKさん、女性四人のバスタオルをもって従者よろしく先導、丁度やってきたこの女性グループに「大学の先生だと思っ」と言っって筆者を紹介してくれた。それをきっかけに話はずんだ。「なにを専攻されているのですか」「刑事法——正確には刑事訴訟法です」「刑訴ですか、私も法学部出身です」

「あ、そうですか」これがBさんでDはその娘さんで、交換留学生として一年間ニューヨーク大学に留学中とのこと。話を聞いているとかなりレベルの高い人という感じがした。

最初の島に着いたが水着を持参していないので、ビーチに入るというBらと別れてその辺を散策していると、「穂高」で時たま見かける子供連れの夫婦と出会った。Aeromexicoでもちらっと見かけたのだが、今度は声をかけると、未知なが

ら驚いていた。このダンナの方はいつも寡黙でおとなしい感じであるのに対し、夫人の方は実に明瞭な話振りで、やはり手、今日も荷物を持った夫を従えて堂々と歩いており面白かった。三〇日まで滞在とのこと、「では又」で別れる。後に名前は知らないがこの常連の夫婦に会った旨「穂高」のマスターに言うと、ああXさんで、奥さんは同時通訳なんですから説明になるほどと頷いたが、奇縁ではある。

次は他の島に渡り昼食をとった。ここも美しいが泳いでいる人はいない。レストランは上に大きな扇風機があり風がさわやかだった。Bらと一緒に座り写真を撮る。帰路の船内では再び生演奏とダンス。B、Dはまた踊っていたが、こちらは一人で船の前方に座り海を眺めて沈思、間もなくやって来たことしばらく雑談した。Cは日本語教師をしており、その関係で東南アジア方面にも出かけるが、別の角度から日本を眺められるなど勉強になる。「是非一度行かれたらどうですか」「そうですね、欧米にはかり目を向けているのはやはり問題でしようね」「ダンスはお嫌いですか」「できないものですか」「歌は?」実は今夜メキシコの歌を聴きに行くことになっており、私も少し支えなければ、「一緒にいかがでしょう」が。私たちは女ばかりで男性に飢えているものだから(笑い)

「そつですね、おじやまでなければ」。間もなく全員が揃った。「明日はChicken-izaに行くつもりですがAがいるので」というので、疲れるが休憩も多く、歩き回りさえしなければAさんでも十分に可能ではないかと話す。下船して、さてどうしようかと思っているが、Kさんが「じゃあ、これで失礼します」。別れて歩き始めるが、Cが「先ほどお誘いしたのですが、もしよろしければ一緒にいかががでしようか」「そつですか、よろしいのですか」「むろん大歓迎です」。Fiestaからすぐ近くのconvention centerで音楽演奏があるとのこと。六時半にその玄関前で待ち合わせることにする。Aらはタクシーで、こちらは歩いてFiestaに入る。シャワーの後、時間があるのでタクシーに乗りDowntownへ。一時間ほど歩き回り、愉快なおぼさんの店で二つほど小物を買った。一〇ドルだった。ドルでいいかと聞くと「Money is money」別れ際に「Hasta la vista nunca」と言った。「おぼさんが大笑いしてHasta la vistaにして下さい」という。これは大阪外大でアルパレス先生がよく口にして皆で大笑いしたことがある別の挨拶言葉で、英語に直訳すると「Until nothing」。「あなたはスペイン語を話すのか」「ほんの少しだけ」。写真を撮ってもじつたあと外に出てタクシーに乗る。Quantos (How much?)と聞くとDiez

もしれないと思いつつ——それを否定しながらの比較文化論のようであり、知的会話に飢えていた筆者にとってもまことに楽しい一晩であった。「父親（Aの夫）は政治家です、今度は前より悪くなりましたが」と言っていたが、新しい地位（準閣僚級？）のことなのだろう。筆者もそれに応じて抑制しつつ少し身辺事情を交えつつ比較論を展開したが、対応にズレがないのに、失礼ながら感心した。Aが「お名刺をいただけますか」「申訳ありませんが持ち合わせていません」「では写真をお送りしますので是非住所を書いてください」。そこでCさんの差し出した手帳に日本の住所を書く。AがCに「私の名刺を差しあげて下さい」。見るとM・ミチコさんでCと同居しているらしい。

ロプスターを頼んだがフォート・リーのロプスター専門店のほうがはるかに旨い。ビールのほか、全員でワイン三、四本空けたせいで酩酊したが、本当に楽しかった。支払いはどうしても受取らないというので「じゃあご馳走になります、有難うございました」。メキシコ風コーヒーへのプランディの注ぎ方は見事で演出効果抜群。暗いところでプランディか何かを燃やしてその青白い炎をそのままでコーヒーの上にかけるわけで、本当に美事だった。少し歩こうというので二〇分

(ten)、一万ペソだ。行き道は六〇〇ペソで六五〇〇ペソ支払ったので今度はせいぜい八〇〇ペソだが、まあドル以下のことだし——これがいけないのだろうか——そのまま支払う。丁度やって来たアメリカ人(?)女性か「どこそこまでいくらか」と確認してから乗り込むのをみて参考になった。

六時一五分、待ち合わせ場所に出かけるのと誰もいない。不思議に思ってパンフレットを見ると音楽演奏は月曜日から土曜日までである。今日は日曜日だった。尋ねてみるとLuna (月)からSabado (土)までのこと。なびと思っているが、向こうの方からKさんの車でAさんらがやってきたが、明らかにKさんのミスである。筆者のホテルに電話したが、外出中で連絡できなかったという。もう一軒あるとのこと。そこに行く、割合豪華なところで雰囲気もよい、一たんそこに決めたが、ステージの真横で音がうるさすぎるのではと席を代えてもらおうとすると、今日はステージ演奏がないとのことだった。Kさんの度重なるミス。Kさんはしきりに謝っていたが、Aの「気に入ったからここで結構です」の鶴の一声できまり。この後一〇時近くまでの三時間余を談笑した。筆者を「大先生」と思っているフシがあり——もっとも、ある夫人を思い出し、東京の人たちはそのように話すのが通例か

ほど歩く。全員やや酔っているせいで、やたらに写真を撮ったが、急にAが筆者の手を握って「帰ってからパパに見せる」浮気の現場写真だという。七〇歳前後だろうが、貫禄十分な方で、別れを惜しみつつタクシー乗り場から四人を見送り手を振りつつ別れる。帰国後一、二度手紙のやりとりがあったが、その後は音信は途絶えた。楽しかった思い出は共有のはずで、あえてそのときの写真を一部掲載することにした。

(d) 三月二十六日、五時前に目覚めたがそのままウトウト、気がつくとき五時五〇分、慌てて飛び起きる。頼んでおいたモーニングコールがないと思っているとコールあり。チェックアウトを済ませるとキャプテンが玄関前にいるタクシーを呼んでくれた。まことに便利。これがFiesta Innのような離れたところだと不便の上なしで、効率の悪いことにイライラし続けるだろうと思いつつ空港へ。一万ペソ、他にチップと買ったが、Kさんが「不用」と言っていたことを思い出さなかつた。六時四〇分着。空港は長蛇の列で、何度も確認して並ぶ。Tourist Cardの写しにパスポートを見せて出国税(?)として一〇ドル支払うと手続は終了。一時間ほど待った後boarding。おおよそ二時間でモーストン着。機内放送で荷物全部持つて出るようにとのこと。これだけは聞きとれた。



—写真 y—



—写真 z—

しかし、代理店の話によると「同じフライト」でヒューストンでは給油のため「one stop するだけ」とのことだったので怪訝に思いつつ外へ出る。JJJで immigration 手続。大急ぎで card に必要事項を書き入れるが時間は経つばかり。思い余って前にいた旅行者に New Ark への connecting flight は JJJ でいいのか聞くと、われわれは different flight なので分からぬという。ええい、ままよと思い、最後列に並び、係員にパスポートと IAP 六六を提示。「Hello」 「Hi. How are you」 「Fine, thank you」 で実に気さくな人。「何を勉強して

とりまとめる。七時半になり少し疲れたので「穂高」に出かけた。時々見かける気持ちのいいアメリカ人がいて、お互いに「やあ、やあ」という感じで少し話す。常連の「カツキ」さんがやって来て、帰国日程が決れば、カンクーンには是非一度出かけた方がいいこと、しばらくみやげ話をする。「明日やはりホテルに行きますか」といつ田中さんらに「一丁かどこと感じたと言って帰る」 テレビを見た後、一二時すぎに寝る。(つづく)

いるのよか「Criminal law」 「Oh, 大阪では何をしているのよか」 「I'm a professor of law」 「Oh」 でおしまい。次に custom gate を通過。掲示を見ると一時二十五分 on time の New Ark 行きあり、ゲートの 32 だがもう一時を過ぎていて。外（構内だが）に出るとターミナルの掲示の多いこと。初めて納得する。ユーステンは International Airport だ。ほとんどの人は JJJ で connecting flight に乗り換える。筆者のよつな、田舎者、はつじちのよつな、Cancun からの non-stop ではなく one-stop だったことは結果的には勉強になったことになる。かなり歩いて——随分広い——一時一〇分頃に 32 に到着。受付女性に名前を告げるとリストを確認。機内は一割ほどしか詰まっておらず、ほとんど空席のため DEF 席の三人分を一人占めして横になった。New Ark 上客をこまかく巡回し四時前に New Ark 空港に着いた。タクシー乗り場で dispatcher に フォート・リイと告げると料金三〇ドル (Fare 30) と書いた紙切れをくれたのでそれを driver に示した。J の運転手さん、Hispanics で英語はほとんど理解できない様子だったが、何とか無事帰宅した。フォート・リイ周辺は車の練習をかねてドライヴしているため、近く来ると地理は分かる。シャワーの後「探訪記」を